

# 曲目解説

## リュートのための古代舞曲とアリア 第三組曲

レスピーギ作曲

作曲者のオットリーノ・レスピーギは、1879年7月9日、ポローニャに生まれました。音楽家としての彼はヴァイオリニストとしてスタートしましたが、やがて作曲家としての道に入り、1913年には「聖チェチーリア音楽院」の作曲科教授に任命されました。そして同院の図書館に所蔵されていたイタリアの古い音楽に関する文献や楽譜を渉猟して研究を重ね、創作の拠りどころとしたのです。その一つの例が、全3集からなる「リュートのための古代舞曲とアリア」です。「管弦楽のための自由な編作」と記され、16世紀から17世紀のイタリアのリュート音楽にその素材を得ています。今日演奏するのは、弦楽合奏のために書かれた第三組曲です。1曲目の「イタリアーナ」と3曲目の「シチリアーナ」の原曲の作曲者は不詳ですが、2曲目の「宮廷のアリア」はジョヴァンニ・バッティスタ・ベサルド、4曲目の「パッサカリア」はロドヴィーコ・ロンカルリの曲がもとになっています。

## オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルンと管弦楽のための協奏交響曲

モーツァルト作曲

協奏交響曲という形式は、バロック時代に高いポピュラリティを持っていた合奏協奏曲が、古典交響曲の概念の影響を受けて発展したものと云われ、18世紀中葉から19世紀初頭にかけてマンハイムやパリでさかんに作曲されました。モーツァルトには、このジャンルでは本日演奏するものの他に、ヴァイオリンとヴィオラのためのもの、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのためのもの（第一楽章途中で放棄され未完成）があります。

1778年3月、田とパリに着いたモーツァルトは「コンセール・スピリチュアル」の支配人ル・グロから、フルートのヴェントリング、オーボエのラム、ファゴットのリッター、ホルンのブントの4人の名手をソリストとする協奏交響曲の作曲を依頼されました。大急ぎで作曲したにも拘らず、モーツァルトの言葉によれば「誰かに邪魔されて」演奏されず、楽譜さえ行方不明になってしまったのです。しかし後にフルートのパートをクラリネットに変更して書き直され、それがこの「K.297b」の協奏交響曲であると云われています。ただその間の事情に不明な点もあり、偽作ではないかという説もあります。曲はきわめて華やかに書かれており、独奏楽器それぞれの特徴が良く生かされています。

## 交響曲第1番

ベートーベン

バロック時代にカンタータやオラトリオなどで、声楽をともしない器楽だけの楽章をシンフォニアと称したのですが、それが独立して、オーケストラのための多楽章形式の楽曲へと発展し、さらにハイドンによって「交響曲」というものの形式が確立されるに至ります。そしてベートーベンはこの楽曲形式を作曲家にとっての記念碑的な高みへと飛躍させたのです。マーラーを最後にその音楽史上の役目を終えるまで、交響曲は作曲家にとって最も重要なジャンルとなりました。

ベートーベンが最初の交響曲を書きあげたのは30歳のときです。交響曲というものに対して、彼が如何に慎重であったかが窺われるようです。この曲については、ハイドンの影響が強い、というのが定説ですが、冒頭の和音や第三楽章が実質的にスケツオである点を初めとして、随所にベートーベンのようなものが見出されますし、又新進作曲家ベートーベンの良い意味での気負い、意気込が感じられます。そして、その後、第2番、第3番「エロイカ」と本当に驚くべき成長を遂げることになるのです。

なお、この曲の初演は、1800年4月2日、ウィーン宮廷劇場においてベートーベン自身の指揮によって行なわれました。